沖縄文化協会 2025 年度東京公開研究発表会

日　時：2025 年 9 月 27 日(土) 10:00～17:05（予定）

場　所：明海大学浦安キャンパス　講義棟 1 階　２１０１教室

参加費：会員は無料、非会員の方は 500 円

全体スケジュール　　総合司会〈波照間永子〉

10:00～10:05　開会の辞　上地聡子（沖縄文化協会 2025 年度東京公開研究発表会実行委員長）

10:05～12:20　研究発表会　【午前の部】

司会〈ティネッロ・マルコ〉

① 10:05～10:35　竹茂敦（東邦大学）
1940 年代後半の沖縄における「チャイナ部隊（物資供応局）」の活動についての考察
―中華民国政府文書を基に―

② 10:40～11:10　近藤健一郎（北海道大学）
近代沖縄における方言札のはじまり再考

③ 11:15～11:45　菅野敦志（共立女子大学）
沖縄と米沢の地域間関係史試論 ―上杉茂憲・伊東忠太・上原清善を中心に―

④ 11:50～12:20　久貝典子（沖縄県立芸術大学）
沖縄の染料植物について

12:20～13:30 －昼食休憩－

＊ 会場の近くに飲食の持ち込みができる「学生ホール」があります。また、大学隣のショッピングセンター「ニューコースト」1 階のフードコートもご利用ください。

13:30～17:05　研究発表会　【午後の部】

司会〈松永明〉

⑤ 13:30～14:00　西岡敏（沖縄国際大学）
『二十四孝』『三字経俗解』の合音訓読（琉球読み）
―想定される「読み」と沖縄語との対照―

⑥ 14:05～14:35　藤田ラウンド幸世（大東文化大学）
話しことばと地域文化を継承するための映像制作
―宮古語、八重山語、与那国語の話者たちとのアクションリサーチ―

⑦ 14:40～15:10　田場裕規（沖縄国際大学）
琉球舞踊の「型」に見出されるカノン形成

15:10～15:20　－休憩－

司会〈小松寛〉

⑧ 15:20～15:50　古谷野洋子（神奈川大学）
波照間島における水田の消滅をめぐって
―長期干ばつ・中型製糖工場の設置・生じた言説―

⑨ 15:55～16:25　高橋順子（金城大学）
戦後の沖縄県における社会調査の変遷―女性と離島を中心に

⑩ 16:30～17:00　大西達貴（東京外国語大学大学院博士後期課程）
「復帰」後の沖縄から「本土」を眼差す
―比嘉康雄の作品群「沖縄から本土を見る」（1973）を手掛かりに―

17:00～17:05　閉会の辞　仲原穣　（沖縄文化協会会長）

＊ 終了後に懇親会を予定しています。
参加をご希望の方は9月24日（水）までに東京公開研究発表会実行委員会事務局（jsos.tokyo@gmail.com）へお申し込みください。
当日のお申し出の場合、ご希望に添えない場合がありますのでご了承ください。

1940 年代後半の沖縄における「チャイナ部隊（物資供応局）」の活動についての考察 ―中華民国政府文書を基に―

竹茂敦（東邦大学）

米国政府から買い取った米軍余剰物資を整理・搬出するために中華民国政府が沖縄へ派遣した「チャイナ部隊」については、沖縄・米国政府の視点からの研究蓄積は相当なものになっている一方で、中華民国政府の視点からの研究（中華民国政府文書に基づく研究）はけっして豊富とは言えない。そこで本報告では、報告申込者がここ１年半程の期間に発掘した中華民国政府文書を基に「チャイナ部隊」について考察を試みる。なお、中華民国政府文書は、国史館（台北市）、中央研究院近代史研究所档案館（同）、国家発展委員会档案管理局（新北市）といった台湾の公文書館で収集したものを中心に用いる。

「チャイナ部隊」の人員が沖縄入りした時期は先行研究でも確定できていないが、報告申込者の調べでは、1946 年 10 月下旬から 11 月前半にかけての時期に派遣された計 30～40 名ほどが最初だと思われる。なお、人員を派遣していたのは「行政院物資供応局」（BOSEY: Board of Supplies, Executive Yuan）であり、沖縄に設置された部署名は「沖縄島儲整処」であった。

「チャイナ部隊」は当初、下着や雨合羽などの衣類、無線機などの精密機器、トラックやジープなどの車両といった軍用余剰物資を搬出していた。しかし、1947 年半ばに米国政府が対中国武器禁輸を解除すると、翌年１月から４月にかけて米中両政府間でグアム、サイパン、沖縄などにある弾薬・爆弾等についての売却交渉が進んだ。その結果、沖縄からは、５月５日に約 1,000 トンを積み込んだ輸送艦（戦車揚陸艦）が上海へ向けて出発したのを皮切りに、８月下旬までに少なくとも約 5,000 トンの弾薬・爆弾などが搬出された。

沖縄島儲整処長の台湾への入境申請が 1949 年７月上旬に提出されていることから、「チャイナ部隊」は６月末で沖縄における活動を終了させたと考えられる。この時期の中華民国政府は共産党との内戦によりすでに中国本土の大半を失っており、「チャイナ部隊」の人員の多くは台湾に引き揚げた。沖縄島儲整処は同年９月末をもって廃止された。

・JSPS 科研費基盤研究（C）研究成果報告書（代表：高橋順子）『「占領初期沖縄における「チャイナ部隊」と米・中関係』、2024 年３月
・波照間陽「米中戦時余剰資産売却協定―戦後沖縄の「チャイナ部隊」を通じた米国の中華民国政府への支援」『軍事史学』第 60 巻第２号、2024 年９月
・蔡西濱「国民政府処理美軍剰余物資之研究－以《中美関於譲售戦時剰余物資協定》為中心」中国文化大学（台湾）史学系博士論文、2020 年

近代沖縄における方言札のはじまり再考

近藤健一郎（北海道大学）

近代沖縄において、日本的な言語や文化などを身につけさせようとする教育がなされたこと、同時に、沖縄の言語や文化などが否定され、抑圧されたことは、近代沖縄教育史の特徴として指摘されてきた。このことは歴史的にどのように展開したのか、近現代沖縄教育史の時期区分論が不可欠である。この点を言語に注目してみるとき、沖縄県置県直後の『沖縄対話』を用いて日本語を教えようとする時期と、方言札も用いて日本語を話させようとする時期では、教育観や教育方法に大きな違いがあることがわかる。前者は琉球諸語を用いて日本語を教えようとするのに対し、後者は琉球諸語を用いずに日本語を身につけさせようとするものだからである。この意味で、方言札のはじまりは、ことばに関する近現代沖縄教育史の時期を画する重要な事象である。

本発表は、このような課題認識に基づいて、方言札のはじまりの時期を再考するものである。発表者はこの点に関しすでに「近代沖縄における方言札の出現」（近藤編『方言札』社会評論社、2008 年）を公にしているが、梶村光郎が新たな所論を発表したことを受け（『方言札の近現代史』不二出版、2025 年。初出は 2019 年）、方言札のはじまりを再検証することを課題とする。そのために以下のような方法をとる。第一に課題に関する研究史をたどり、どのような方法に基づき、方言札のはじまりを論じていたかを明らかにする。第二に、その到達点に対して梶村が提示した新たな所論を整理して、それを後述する二点から再検証する。本発表の構成・内容は以下の予定である。

１、方言札のはじまりに関する研究史

沖縄県立第一中学校での体験の回想に基づいて、「明治 40 年ごろ」に方言札が現れてきたことを外間守善が論じ（『沖縄の言語史』1971 年。初出は 1963 年）、それは『沖縄大百科事典』（1983 年）などによって広く知られてきた。

この研究状況において、発表者は前掲の拙稿により、学校記念誌に掲載されている回想に基づき方言札が用いられていた時期を確認するのと同時に、教員の授業中のことばに注目して札の不存在時期を考察することによって、その出現時期を 1900 年代前半とした。

２、梶村光郎の所論とその再検証

梶村は、新たに見出した回想に基づき、方言札のはじまりを 1895 年度か 1896 年度頃であると訂正すべきとした。その際、「方言を使用させないで標準語を話させようという強い意志を教員が持った場合、どの時点でも方言札は出現するということだけは言えそうである」と述べており、提示した時期もさらに遡りうることを示唆している。

この所論を、一つには回想者、内容に注目して回想そのものを読み直すこと、もう一つには、同時期の方言札に関する回想を得られるのかどうかを調査すること、この 2 点から再検証する。

その再検証を通じて、現時点では、近代沖縄において 1895, 96 年頃に方言札が用いられはじめたという所論が認められる段階にはないことを明らかにする。

沖縄と米沢の地域間関係史試論
―上杉茂憲・伊東忠太・上原清善を中心に―

菅野敦志（共立女子大学）

沖縄市と米沢市（山形県）は、2024 年 9 月に姉妹都市 30 周年を迎え、米沢市議会は慰霊の日（6 月 23 日）に近い定例会最終日で全員がかりゆしウェアを着用する「かりゆし議会」を実施した。両都市の姉妹都市締結は 1994 年にさかのぼるが、そのつながりは歴史的にも深い関係性が見出せる。とはいえ、そうした沖縄―米沢間の関係性をめぐって包括的に議論した先行研究は見当たらない。そのような状況に鑑み、本報告は「本土―沖縄」関係のイメージを「中央―地方」の視点ではなく、「地域―地域」の視点で考察する一つの試みとして、米沢と沖縄とのつながりをとりあげ、主に 3 名の人物（戦前期：上杉茂憲、伊東忠太、戦後期：上原清善）に焦点を当てて初歩的な検討を行ってみたい。

上杉茂憲（1844～1919 年）は旧米沢藩主として第 2 代沖縄県令（1881～83 年）となり、沖縄の近代統治制度の確立にむけて開明的な提言を行った。米沢市名誉市民第一号（1954 年）である建築家の伊東忠太（1867～1954 年）は、築地本願寺や一橋大学兼松講堂などの数多くの名建築を手がけたが、1924 年に沖縄を訪れて文化財調査を進め、首里城保存を実現させた貢献でも知られる。2 名が米沢出身の人物である一方で、戦後期では沖縄出身の上原清善（1919～2011 年）がいる。企業家であり篤志家でもあった上原は、沖縄市と米沢市が姉妹都市を締結するきっかけをつくった。

ちなみに、上杉茂憲の立ち位置は、戊辰戦争における“敗者”としての歴史、すなわち「奥州越列藩同盟」の有力藩であった米沢藩にかけられた汚名を晴らす「戊辰雪冤」を背負うものでもあった。「旧藩主」と「中央官僚」の狭間にあった上杉茂憲が、“旧秩序の敗者”としての経験を背負う存在として沖縄県令となった点は重要であろう。一方の伊東忠太についても、帝国の周縁に位置づけられた地域文化に対して、固有の美的価値と歴史的意義を見出そうとする姿勢がみられた。他方、1974 年にフィリピン・ルソン島で米沢出身の戦友・高橋房雄の遺骨を掘り起こし、遺族に届けた上原清善の行為は、ややもすれば本土側による沖縄の支援・救済の歴史によって印象づけられがちであった戦前期の両地（米沢―沖縄）の関係性を変化させる働きを担った。要するに、上杉の「人材育成による地域再建」、伊東の「東洋美学の視座からの地域文化の救済」といったような戦前期の記憶を介して構築された「米沢→沖縄」の地域間認識は、上原の「戦時下の友情に基づく越境慰霊」によって、「沖縄→米沢」への認識転換を可能とさせたといえよう。

以上の点から、本報告では上杉茂憲、伊東忠太、上原清善という 3 つの人物に焦点を当て、刊行史料を基にした文献分析を中心としながら、3 つの時期にまたがる米沢／沖縄出身者を中心とした複層的な地域間関係をめぐるイメージ構築・変容過程について考察を試みてみたい。

沖縄の染料植物について

久貝典子（沖縄県立芸術大学）

１．先行研究

沖縄の織物に使用された植物染料は、沖縄の気候・風土にマッチした、本土と異なる染料植物が多用されている。本研究では、その中の一部である藍・グール・フクギ・クロサギ・ヤマムムなどの植物染料について報告する。

本発表の染料植物は、『鎌倉芳太郎資料集』（以下『資料集』と省略）Ⅰ～Ⅳ巻から 18 種の植物染料名を選出したものの一部である。先行研究は、本土と異なる植物染料を多用した歴史から、それほど多くないが、大正・昭和初期の鎌倉芳太郎の研究があり、『資料集』(2004～2016)・『沖縄文化の遺宝』(1982)その他幾つかが確認される。昭和 50 年以降では田中俊雄『沖縄織物の研究』(1976)、上村六郎著『沖縄染織文化の研究』(1982)、竹内淳子『風土が生んだ色』(1991)ほかの著作等がある。平成に入ると復元研究の進展と連動するように、史料に記録された染色文化研究が活発化している。例えば大湾ゆかり「琉球藍関係史料からの一考察」(2021)ほかの一連の論考などがある。概観すると、1990 年頃までは文化研究の中の染色研究という側面が強かったが、2000 年以降は、沖縄の服飾品の復元をより正確に行うため、その裏付けとして文献資料に記録された染料植物の研究が拡大していると考える。

２．研究の背景

拙著『『鎌倉芳太郎資料集』をもとにした染織用語解説(上)』を 2024 年 3 月に出版したが、その際に先学より貴重な助言を受けた。本発表及び研究の背景としては、それらの指導を本研究に活かし、研究をより深めることを目的とする。

３．目的

２項で述べた事柄を活用し、染色の名称が記載されている史料などの読みを示し、本研究の現状を報告したい。

４．方法

沖縄の染料植物は、多くが沖縄独自の染料植物である。近世期の琉球の頃から、いわば地産地消の染色技術が伝わっているのであるが、その事実自体、あまり認識されているとはいえない。本発表では、『資料集』に散見する植物染料名について、それらの名称が所収されている琉球の近世史料の読みを示しつつ、名称の解釈方法について示す。

５．結論

近世期の沖縄染織の文化は、本土の染織文化に影響を与えている。その織物は、織りと染めという２つの技法が調和し、一つとなって表現されている。仕上がった「もの」は、織りも染めも沖縄独自の個性を表現する文化として、現在に伝わっている。

『二十四孝』『三字経俗解』の合音訓読（琉球読み）
―想定される「読み」と沖縄語との対照―

西岡敏（沖縄国際大学）

【先行研究】

高橋俊三（2011）は、八重山に残された竹原家文書『二十四孝』『三字経俗解』等を翻刻し、近世琉球で漢籍の学び手が「首里方言」（漢文訓読調が交じる）で解説した文書部分に日本語訳を付している。田場裕規（2022）は、『琉球板本六諭衍義大意』（以下、『琉球板本』）を足掛かりに、琉球国の漢文教育の実態を見究めようとし、当時の「合音訓読（沖縄語の発音による訓読、琉球読み）」および「開音訓読（日本語の発音による訓読、開口読み）」の反映が、『琉球板本』に残された仮名書きからも窺い知れる、としている。

【研究の背景】

比嘉春潮（1971：541）によれば、『二十四孝』『三字経俗解』は合音訓読（琉球読み）されたという。しかし、送り仮名・振り仮名や読み下しの記載からは、一部の誤った類推表記を除き、開音訓読として読めるものばかりである。ベッテルハイム（喜名朝昭他 1984）が記録に残した「講義」「読書」の漢文の「読み」は、沖縄語による「読み下し」にも見えるが、補助的な語彙が、通常の「読み下し」よりは多く含まれ、合音訓読と同一視することは難しい。むしろ、「合音訓読」は、「開音訓読」と平行的に、「発音のみを沖縄風に置き換える」ような形で成立している。

【目的】

『二十四孝』『三字経俗解』の「開音訓読」と「合音訓読」を仮説的に提示し、当時の合音訓読（琉球読み）と沖縄語との関係を明らかにする。

【方法】

『二十四孝』『三字経俗解』の漢文部分について、「開音訓読」と「合音訓読」の双方で読み下す（音韻記号ならびにそれに準じた仮名表記で示す）。その際、実際にある沖縄語との比較・対照を行う。

【結論】

琉球における漢籍とはいえ、漢文訓読の際に示される仮名の要素に、沖縄語独自のものはほとんど無く、ほぼ日本語からの借用を思わせる。借用語を含めて意図的に、三母音化（エ→イ、オ→ウ）、口蓋化・破擦音化（キ→チ）、後母音の前母音化「スツズ→スィツィズィ」等の音変化をさせて発音させたものが「合音訓読」であろう。しかし、沖縄語で起こった音変化の規則のどこまでが「合音訓読」に適用されるのか、その範囲が問題になってくる（例えば、w音の脱落は考慮されるのか、係助詞「は」の琉球読みは「ヤ」ではなく「ワ」でよいか、等）。

［参考文献］

喜名朝昭・伊波和正・森庸夫・高橋俊三訳（1984）「ＢＪ・ベッテルハイム著『琉球語と日本語の文法の要綱』」『南島文化』6（沖縄国際大学南島文化研究所）

高橋俊三（2011）『琉球王国時代の初等教育―八重山における漢籍の琉球語資料―』（榕樹書林）

田場裕規（2022）「憂鬱なることばの教育―『琉球板本六諭衍義大意』をめぐって―」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』26-2（沖縄国際大学日本語日本文学会）

比嘉春潮（1971）「訓読・直読の実際」『比嘉春潮全集第３巻』（沖縄タイムス社）

話しことばと地域文化を継承するための映像制作
―宮古語、八重山語、与那国語の話者たちとのアクションリサーチ―

藤田ラウンド幸世（大東文化大学）

沖縄県では、1950 年、1960 年生まれの子どもたちに対して、当時、両親は家庭内では日本語だけで子どもと話し、琉球諸語を話すことには消極的であったという。その背景には、学校教育を通して標準語（日本語）が使われ、また、日本語ではない地域言語を使用した時には「方言札」という罰則が使われた明治時代からの同化政策がある（Ishihara et al 2019; Fujita-Round 2022a)。家族間で、家庭内言語であった琉球諸語は、日本の言語政策下で 20 世紀半ばくらいから徐々に日本語へと置き換わった。

家庭内では琉球諸語、学校では日本語を使うという二言語使用は、バイリンガリズムとして捉えることもできる。琉球諸語は、本来、就学前に家庭内言語で母語として習得する話しことばである。デ・ホーバー（2021）が概説するように、二言語習得の発達段階は、１）0-2 歳の乳幼児期に母語の音声獲得、２）3-6 歳の就学前の子ども期に文化、社会的ルールを言語と同時に身につけ、３）7-11 歳の学童の子ども期に二言語の話しことばの習得を伸長することに加え、教育を通して一言語、もしくは二言語の書きことばも習得する、すなわち子ども期の成長と言語習得は重なるものである。

2012 年から筆者は社会言語学の先行研究がない宮古島で宮古語と日本語のバイリンガル話者の調査（藤田ラウンド 2015、2016）を開始した。宮古島市の中学生に 3 年間にわたる縦断インタビューを行いながら、子どもたちの親・祖父母世代に話を聞きに集落に通った。3 年後、集落内の複数のキーパーソンのおかげで、2015 年から許可を得た上でインタビューの映像撮影を開始した。結果として、ドキュメンタリー映画『みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声』(2015-2017 年撮影、2019 年完成、47 分）が完成した。一連の映像制作を通し、孫世代の 10 代、20 代の若者たちとのやり取りを映像編集のために繰り返し聴き、自らの祖父母らの流暢な話者とは異なる想いに着眼するようになった（Fujita-Round 2022b)。映像を手法として、新たな話者（New Speaker）のための「学び」となる映像制作の着想を得た。

映像制作は、社会言語学研究者の筆者と映像アーティストの服部かつゆき氏とで行う。企画、研究、現場での調整、インタビュアーを筆者が、撮影と編集を服部氏が担う。2012 年から 3 期の科研を 2023 年から現在に至り、4 期目の科研助成金を獲得し、後者の科研では、宮古島で培った映像制作の経験を、石垣島、与那国島の研究分担者、多良間島、竹富島の研究協力者に伝え、協働し、言語と地域が南琉球に拡大しつつある。2015 年から研究成果としての映像公開の場として YouTube を開設し、2025 年 7 月までに琉球諸語に関わる 1-15 分の映像クリップビデオは約 60 本を公開している（「多言語で生きようプロジェクト」＜https://www.youtube.com/channel/UCtsbu9qQ7GUiB558D4z4Brg＞)。

本研究では、琉球諸語の新たな話者を念頭に置いた琉球諸語の話しことばと地域文化の継承に資する映像を残す挑戦であり、宮古語、八重山語、与那国語の話者たちと協働するアクションリサーチである。

琉球舞踊の「型」に見出されるカノン形成

田場裕規（沖縄国際大学）

【先行研究・研究の背景・目的】

西平直（2019）は、「型」について「想定外の事態に対して「備える」という言葉は相応しくないかもしれないのだが、「型」の知恵は、ハプニングに対応する身体を育てようとする。不測の事態においては、その時その時に即して、自在に自分を変えてゆかねばならない。そうした可能性に開かれた身体を育てる知恵が「型」である。」と指摘する。換言すれば、「型」は固く守らなければならない基礎・基本であると同時に、積極的に離れて、破っていかなければならないものということができる。琉球舞踊における「型」は、ハルオ・シラネ（１９９９）が指摘するカノン形成を理論的枠組みとして見出すとき、「正典」として理解されてきた。本発表は、琉球舞踊における「型」という概念を再考することを目的とする。

【方法】

昭和 11 年（1936）５月３０日、３１日の両日（昼夜二回）、日本民俗協会主催（主宰折口信夫）の琉球芸能公演が、明治神宮外苑日本青年館大講堂で行われた。この芸能公演は、近代における琉球芸能のカノン化の画期といってよいだろう。日本民俗協会の月刊『日本民俗』第九号（昭和１１年 3 月）には、「「琉球古劇」大会開催　附、琉歌・三味線・舞踊・」と題して「先頃、折口先生が琉球に赴かれ、同地の組踊―琉球の古劇-を御覧になつて」と記し、公演の案内が掲載された。注目すべきは、組踊を「琉球の古劇」としている点である。しかし、その後、第１０号まで「琉球古劇大会　附、琉歌・三味線・舞踊・」とされていたものが、第１１号では、「琉球古典芸能大会」となった。開催直前の変更といってもよいだろう。この変更の意味を、『日本民俗』誌上で行われた、座談会等の記述を読解・分析を試みる。

【結論】

琉球舞踊における「型」は、昭和 11 年（1936）５月３０日、３１日の両日（昼夜二回）、日本民俗協会主催（主宰折口信夫）の琉球芸能公演がカノン形成の画期となっている。

（参考文献）

・西平直（２０１９）『稽古の思想』春秋社
・ハルオ・シラネ（１９９９）「総説　創造された古典――カノン形成のパラダイムと批評的展望」『創造された古典――カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社

波照間島における水田の消滅をめぐって
―長期干ばつ・中型製糖工場の設置・生じた言説―

古谷野洋子（神奈川大学）

【研究の背景、および先行研究】

八重山地方波照間島は日本最南端の離島である。隆起サンゴ礁でできた低い島であり、水稲稲作には適さない。しかし、人々は天水田によって稲作を定着・発展させてきた。同島に伝承されてきた稲作技術からは、稲作に対する人々の深い思い入れがうかがえる（古谷野 2024・2025 など）。

琉球政府は 1959（昭和 34）年に糖業振興法を制定した。1960 年代は八重山地方の生業の転換期であり、波照間島でも島の農業はサトウキビ栽培一辺倒になった。稲作からサトウキビ栽培への変換に関しては、「島を襲った異常な干ばつは稲作に壊滅的な打撃を与え（中略）天水田は全滅した。そして稲作は姿を消していった」と通事孝作(2023)は述べている。島の人々も、「干ばつが続いて稲作ではやっていけないことがわかった」と語る。そして、波照間製糖株式会社の成立(1962 年)から中型製糖工場の設置（1963 年）は長期干ばつの最中であり、天水田を崩す作業を担当したのは新設された製糖工場の職員であった。

【研究の目的と方法】

本発表はあくまでも八重山地方の農耕文化という視点から、天水田の消滅の経過について検討する。そして、島の人々の農業に対する心意に注目し、同島の農耕文化を支えてきたものが何であったかについて考えたい。方法としては、経験者からの聴取や新聞記事などから、中型製糖工場の設置の過程と長期干ばつの実態について述べるとともに、同島の人々の気質に関して生じた言説（「新しい営農法に生きんとする “波照間”気質」（八重山タイムス 1962.7.20）・「島民の保守性、創造性の欠如、島嶼性」（宮良高弘）など）に注目する。

【結論】

1955 年～1963 年まで、同島はほぼ毎年干ばつに襲われていた（1956 年のみ豊作・1959 年は台風被害）。同島の人々は、「コメ作りに見切りをつけた」「わずか 2 年で島のすべての天水田を崩した」という。1964 年 2 月 9 日の「八重山朝日新聞」には「水田は 100％キビ畑換地」とある。しかし、実際には天水田の「100％キビ畑換地」はそれほど簡単ではなかったようだ。当時生じた同島の人々に関する言説からも、人々の思いは必ずしも同じではなかったことがわかる。だが、結果的には、同島は「サトウキビの島」として成功した。小離島にとって農業の基本は〈餓死しないこと〉であり、それを支えてきたのは「共同の力で支え来た島の精神」であったといえよう。

【参考文献】

古谷野洋子　2024「沖縄県八重山地方における〈低い島〉の稲作文化―波照間島の天水田における在来イネの栽培技術―」『沖縄文化研究』51 号

2025「八重山地方の〈低い島〉における水田の成立―波照間島の水田の立地・種類と類別・分布から―」『沖縄文化研究』52 号

通事孝作　2023「「稲作栽培」から「サトウキビ単作」の波照間島」竹富町教育委員会編集発行『竹富町史だより』51 号

宮良高広　1972『波照間島民俗誌』木耳社

戦後の沖縄県における社会調査の変遷
―女性と離島を中心に―

高橋順子（金城大学）

戦後の沖縄県では、政府、自治体、新聞社、ＮＨＫ、学術団体など様々な主体によって、社会意識を問うために、様々な種類の調査が、復帰以前から数多く実施されてきた。先行研究の安藤・鈴木（2012）が指摘するように、沖縄は、本土とは異なった社会構造と歴史的・文化的背景のために、しばしばそれ自体を全体社会（調査母集団）とする調査のフィールドとなってきたからである。これら既存の沖縄県における／をめぐる社会調査の結果は、その時々の社会に影響を与え、解釈され、また後年も利用者の関心に合わせて引用されてきた。しかし、情報が整理されておらず、誤用・誤解が生じるなど、十分な活用に至っていない。

そこで本報告では、実施されてきた社会調査のうち大規模な世論調査の基礎的情報を整理し、結果に映し出された沖縄の社会意識を検討し、実施されてきた社会調査の歴史的意義、現在的意味を明らかにすることを目的とする。その際、調査者の目的や利用方法、また女性、離島の結果にも注目したい。

まず、これまでの沖縄県における社会調査について、先行研究である保坂廣志（1984、1997、2005）を踏まえ、情報を追加し基礎的情報を整理する。次に具体的な事例として、1967 年実施「第 1 回全琉世論調査」、2001 年実施「県民意識調査」（琉球新報社）、2022 年実施「政治参加と沖縄に関する世論調査」（熊本・田辺）などを取り上げて検討する。さらに、沖縄県知事選挙の結果等と照らし合わせ特徴を分析する。

検討の結果、沖縄県をめぐり沖縄県、全国、外国在住沖縄出身者、外国など様々な対象の調査が実施されてきたこと、他の都道府県に比べて県民意識等の社会意識について異なる特徴があること、女性や政治的関心が低い傾向にあること、離島は保守的な傾向があること、1980 年代から文化的固有性への関心が高まり自立の方向性を探る試みに活用されてきたこと、1990 年代半ばから「沖縄県民であることの誇り」が優勢になってきたこと、法的地位への関心が高まってきたことなどが分かった。

調査の実施やそこで示されてきた結果は、必ずしも現実を変える結果には直結してはこなかったが、「沖縄（人）とは何か」、「沖縄の心」を探り、沖縄県に住む人々の将来を主体的に構想するために資されてきたと言えよう。復帰 50 年を経て、高齢化により沖縄戦体験者世代が調査対象から外れていくなか、今後どのように沖縄県をめぐる世論が変化していくのか、ますます注目していく必要がある。

安藤由美・鈴木規之編 2012『沖縄の社会構造と意識』九州大学出版会
保坂廣志 1984 年「戦後沖縄住民の意識変容に関する時系列的比較・分析」『復帰後における沖縄住民の意識の変容』琉球大学法文学部社会学科広報学研究室
保坂廣志 1997 年「沖縄県民と世論」『現代沖縄の政治と社会―1996 年衆議院選挙前後の政治意識分析を中心に』琉球大学法文学部
保坂廣志、2005、「沖縄県民意識調査の変遷史」『戦後 60 年沖縄社会の構造変動と生活世界』琉球大学法文学部人間科学科社会学専攻
高橋順子 2025「沖縄県における／関する世論調査」熊本博之・田辺俊介編 2025『復帰 50 年の沖縄世論』筑摩書房

「復帰」後の沖縄から「本土」を眼差す
―比嘉康雄の作品群「沖縄から本土を見る」（1973）を手掛かりに―

大西達貴（東京外国語大学大学院博士後期課程）

①先行研究：写真家、比嘉康雄（1938-2000）が「復帰」後に日本を縦断する旅を行った中で撮影された作品群「沖縄から本土を見る」（1973）は、沖縄タイムス紙（2 月、10 回の連載）・『カメラ毎日』（3 月号）に掲載されたほか、比嘉自身が最初の写真集『生れ島・沖縄』（東京写真専門学院出版局、1972）を『生まれ島・沖縄 アメリカ世から日本世』（ニライ社、1992）として再編する際に追加されている。比嘉の作品については、ライフワークともいえる琉球弧の祭祀記録が主な分析・考察の対象となってきたが、この作品群については、『カメラ毎日』での福田定良による講評や、のちに仲里効や大竹昭子によって行われた比嘉とのインタビュー記事のなかで分析の対象となっている。

②研究の背景：琉球弧の祭祀記録がライフワークとなる比嘉康雄は、東京写真専門学院在学中に発表した最初の作品群「生まれ島・沖縄」（1971）に続いて、「本土」を旅して撮影した作品群を発表する。比嘉は沖縄の「復帰」を機に、北海道から鹿児島までを縦断し、日本列島をじかに見ることを目指していた。比嘉は「生まれ島・沖縄」を撮る中で、占領下の諸相を告発する「沖縄問題的な視点」を経て、自らの生活の中での関心に基づいて撮る「私の視点」を獲得しており、「本土」の旅でも三沢や佐世保、四日市や水俣など基地や公害に関する場所に足を運びつつも、その場所での日常に関心を向けていた。

③目的：本発表では比嘉が「復帰」を機に行った日本縦断の旅を紐解くことによって、戦前から「本土」の写真家・メディアによって沖縄に投げかけられていた眼差しの相対化、すなわち沖縄から「本土」を眼差し返す試みという観点で考察する。加えて、平敷兼七や伊志嶺隆など、同じく「本土」で写真を撮った沖縄の写真家たちと連関させて分析する可能性についても検討する。

④方法：本発表では比嘉康雄による「本土」を映した作品群とキャプション、旅する中で記されたテクストに加え、①で言及した作品への講評や比嘉へのインタビュー記事などを手掛かりに、旅の意図やその後の作品群への連続性を考察する。そのうえで、近い時期に「本土」で写真を撮っていた平敷兼七・伊志嶺隆の例と合わせて、沖縄の写真家たちが眼差す「本土」という主題を掘り下げていく。

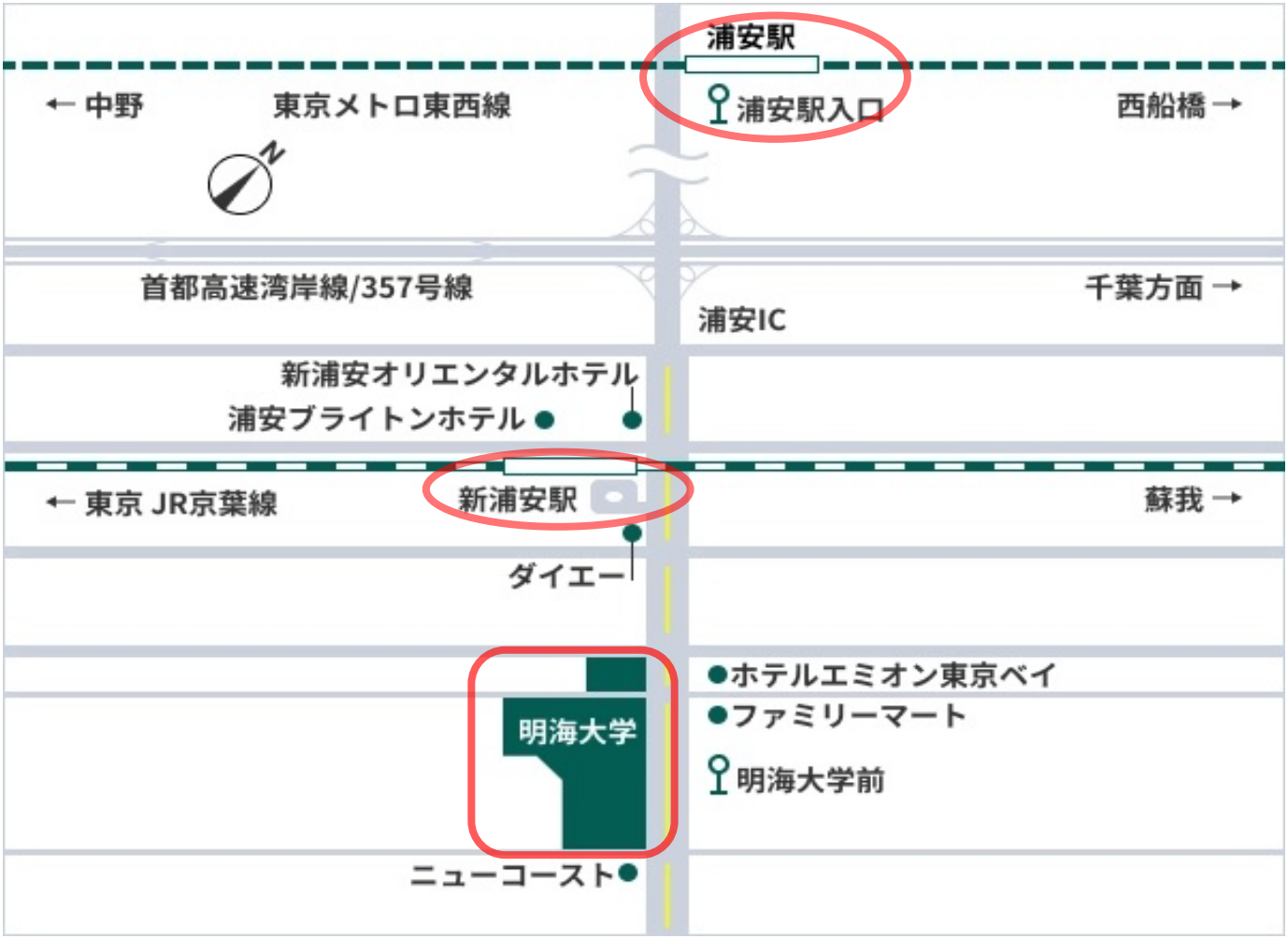
⑤結論： 比嘉康雄による「本土」の旅は、「生まれ島・沖縄」から琉球弧の祭祀世界記録に通底する、属性や文脈を捨象した「人間」という主題の獲得につながっていた。さらには、沖縄から「本土」へ眼差しを投げ返す試みの先駆でもあった。

主要文献

・『カメラ毎日 3 月号』（1973）、毎日新聞社。
・大竹昭子（1994）『目の狩人 戦後写真家たちが描いた軌跡』、新潮社。
・仲里効（2009）『フォトネシア 眼の回帰線・沖縄』、未來社。

◆発表会場

明海大学　〈〒279-8550 千葉県浦安市明海１丁目〉
浦安キャンパス　講義棟１階　２１０１教室



◆アクセス

新浦安駅から
写真で見るルート

明海大学
アクセスページ

■JR 線　［新浦安駅］　から
・徒歩 12 分
・駅前ロータリーからバスも出ています。

■地下鉄東西線　［浦安駅］からバス 15 分
・「浦安駅入口」より 3・11・18 番のバスに乗車、新浦安駅経由総合公園方面「明海大学前」下車。
・「明海大学前」直通のバスは本数が少ないのでご注意ください。
・浦安駅から「新浦安駅北口」を経由するバスは本数が多いので、そちらも併せてご検討ください。

空港からのアクセス：新浦安駅は羽田空港・成田空港との間にリムジンバスがあります。事前予約が必要ですので、運行表と併せてご確認ください。

◆宿泊予定の方へ：ホテルのご案内

新浦安駅が東京ディズニーランド最寄りの舞浜駅に隣接している関係で、明海大学にアクセスの良い近隣のホテル予約は難しいことが予想されます。京葉線・武蔵野線（新浦安駅）や東西線・総武線（浦安駅）に比較的アクセスが良く、リーズナブルな価格のホテルを以下にいくつかご案内します。

【スーパーホテル東西線・市川・妙典駅前】

千葉県市川市妙典４－４－２７妙典センタービル

電車/東西線妙典駅下車　徒歩２分 車/市川 IC より約７分

【サンホテル船橋】

千葉県船橋市本町６－２１－１８

JR 船橋駅北口から徒歩５分

【浦安サンホテル】

千葉県浦安市当代島１－１９－１３

東京メトロ地下鉄東西線浦安駅より徒歩３分

【東横ＩＮＮ茅場町駅】

東京都中央区日本橋茅場町１－４－９

東京メトロ東西線茅場町出口７から徒歩１分 日比谷線茅場町出口７から徒歩１分

【パールホテル茅場町】

東京都中央区新川１－２－５

茅場町駅４ｂ出口より徒歩３分、東京駅からタクシーで５分

【東横ＩＮＮ神田秋葉原】

東京都中央区日本橋馬喰町２－２－４

JR 総武線浅草橋駅東口徒歩５分、都営浅草線浅草橋駅 A2 徒歩４分、JR 総武線快速馬喰町駅東口６番 C4 徒歩２分

◆入会案内

△　沖縄文化協会は、沖縄の文化を研究紹介し、その進展に寄与することを目的とし、広く沖縄研究者および沖縄に関心を持つ人々を会員として運営されている会です。

△　本会は、上の目的にそって、研究発表会、公開講演会、機関誌『沖縄文化』の刊行、沖縄文化資料の蒐集、複製、刊行などの事業を行っております。

△　所定の会費を納めれば、どなたでも会員になれます。年間会費 5,000 円（誌代２冊分を含みます）

△　会費は振替もしくは現金為替で、下記の所へお送りください。

〒903-0815　沖縄県那覇市首里金城町３-６

沖縄県立芸術大学附属研究所　　電　　話：098（882）5043

鈴木耕太研究室気付　　振替口座：02030-5-25170

『沖縄文化』編集所　　ＵＲＬ　：http://www.okinawabunka.org/